

その50 交野ヶ原

(平成18年8月1日号—第244号)

交野[かたの]といえば、今日では交野市のことを指しますが、明治29年までは現枚方市域の大部分を含む交野郡という広い領域がありました。交野郡は大宝[たいほう]2年(702)頃に茨田[まつた]郡から分割して設けられたもので、以後、交野といえば現在の枚方市域のことを指していることが多いのです。

交野郡の中央部を占める台地・低丘陵の部分が交野ヶ原と呼ばれていました。この



86 惟喬親王遊獵(『河内名所図会』)

地は水田に適せず鳥獣が多く生息し、長岡京・平安京からもほど近いため、桓武[かむむ]天皇を初め平安貴族たちが鷹狩[たかがり]などで頻繁に訪れています。鷹狩は、飼いならした鷹にカモやウサギなどの鳥獣を捕まえさせるもので、桓武天皇は殊に好んだそうです。交野には禁野[きんや]と呼ばれる天皇の狩場が設けられ、庶民が狩りをするのを禁じていました。今も枚方市内には禁野の地名が残っています。

また、清少納言[せいしょうなごん]は『枕草子[まくらのそうし]』で趣のある野として交野を挙げています。風光明媚[ふうこうめいび]な交野は、和歌の題材として多くの歌に詠まれました。惟喬親王[これたかしんのう]の別荘である渚院[なぎさのいん]の桜を見て在原業平[ありわらのなりひら]が詠んだ「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」(『伊勢物語』・『古今和歌集』)によって、交野と桜が強く結びつけられるようになります。

鎌倉時代になると藤原俊成[ふじわらのしゅんぜい]は「またや見む交野のみ野のさくらがり花の雪散る春のあけぼの」(『新古今和歌集』)と詠み、さらに時代が下ると『太平記』では俊成の歌を踏まえて「落花の雪に踏み迷う交野の春の桜狩、紅葉の錦を着て帰る嵐の山の秋の暮れ」というように、嵐山の紅葉と並んで交野と桜は切り離せない関係として定着したのです。

現在、市内には百済寺跡公園・牧野公園や船橋川の堤防など、身近なお花見スポットが点在し、地域の人たちに親しまれています^{*1}。

^{*1} これまでの「菊」に追加して、平成19年2月に「桜」を市の花に制定した。